

Title	昭和三十三年度史學科秋季見學旅行記
Sub Title	
Author	松島, 忠(Matsushima, Tadashi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1959
Jtitle	史学 Vol.32, No.2 (1959. 7) ,p.112(240)- 114(242)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19590700-0112

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ウーラの傾向があっただけだと主張する。そしてこの傾向は十三世紀後半、スコトウスの説が有力になるまで最も顯著であったが、後はそれにとって代わられた。けれどもフランススコ會學派に對するボナヴェントゥーラの影響は、なお現在にいたるまでかなり大きかったのであつて、その點では從來過少評價されていた感がある。ことに十六世紀に、ローマで最初の全集がでたこと、及びスペインのカラタユド出身の學者 Peter Trigo さんがトマスとボナヴェントゥーラを共に稱揚し兩者の融和をはかったことから、十七世紀には Bartholomew de Barberis を中心にしてボナヴェントゥーラ復興がおこっている點がとりあげられる。またこの運動の中核がカプーチン會士であつたことに注意すべきである。だがボナヴェントゥーラへの眞の關心の復興がおこつたのは、千八百八十二年から千九百二年にかけての批判版全集がクアラッキから發行されて以後であると著者は結論している。

とくに本書の功績といえることは、十四世紀以降の今までとりあげられなかつたボナヴェントゥーラ研究者の名前を列擧したことであろう。ただその各々についての分析があまりに簡單なので、叙述がやや平板に流れているきらいがある。またその視野をあまり嚴密に哲學と自然神學に限つたため、ドイツ神祕主義或はシェルソンへボナヴェントゥーラが及ぼした影響に言及できなかつたのも残念である。しかしこれらの點はなお今後の課題として残さるべきであり、われわれは本書の先驅的な意義を認め、これを手

がかりにして、ボナヴェントゥーラ of 思想史的影響をさらに廣くかつ深く追求すべきであらう。(坂口昂吉)

彙 報

昭和三十三年度史學科秋季見學旅行記

十月十三日(火) 午前七時三十分米原驛集合。前夜東京を發つた者が半数で、先發して北陸路から、京阪から驅けつけた者もいて、一行は指導の伊木・淺子兩先生、高橋副手、及び學生を合せ計十三名。久し振に小人數である。北陸本線高月驛どうがみから渡岸寺の觀音堂へと足を運ぶ。

そこで本尊十一面觀音像を拜觀。像は高さ六尺四寸三分の木造の立像で、本面を除く十面・耳璫・瓔珞以外はすべて一木で彫られている。僅かに腰を左にひねって右脚を少々前に踏み出し、左手で軽く水瓶をとり、右手を下に長く垂れた姿態は奈良法華寺の十一面觀音像に似通うものがあるが、殊によく引締つた顔や體の張りの強さと天衣等に見られる彫法の鋭さはすばらしい。他に類例を見ない耳璫・頭上の十面の特殊な配置からも平安初期木造彫刻の勃興期に際して大陸の作風の日本化されんとする過渡期の作品と考えられる。臺座と光背は失われているが、此の度臺座と須彌壇が新調された。本尊の左右には阿彌陀如來、大日如來の二體

の座像が安置されている。當寺の山岡外次郎氏より附近の史蹟等について説明を受けた。觀音堂を辭して彦根へ出る。

晝食後、彦根城を見學。本城は關ヶ原役後慶長八年井伊直孝が築城に着手し、二十年を経て完成したもので、周圍約四軒三重の濠をめぐるしている。

さて、表門橋を渡り、舊本丸御殿跡を右に見て天秤櫓（長濱城より移建）、太鼓門（城中最古の建築物）を経て、天守閣へ出る。天守閣は現在解體修理中であるが、石垣の下から天守閣の棟までの高さ約二十米、三層で、京極高次の築城にかかる大津城から移建したものである。工事主任の清水榮四郎氏より本城の歴史や解體當時の様様、進行狀況等の説明を工事現場でうかがった。本日は彦根宿泊。

十四日（水）彦根から八日市に出、永源寺を見學した。寺は愛知川の上流二十五軒紅葉の名所として有名であるが、遺憾ながらまだ色づいていなかった。

さて當時は臨濟宗永源寺派の大本山で、康安元年（一三六一）六角氏頼が蘭溪道隆の弟子寂室元光を請じて開山としたのにはじまる。明應四年（一四九五）には五山に準位され、更に紫位出世道場の宣旨を受け、江戸時代には井伊氏が當時の外護に充てられた。境内の諸建築を見、標月の間で古文書を見學。

開山遺誡一卷、開山和尚遺傳一卷、開山寂室和尚和文横物一卷、内應禪師墨蹟「即心即物」一卷、開山和尚誕生慈文祝歌一卷、開

山和尚三十三回諱香語一卷等開山内應禪師關係のものが多く、開山の頂相も數點あった。その他後奈良天皇綸旨二通、延寶三年の永宣旨等數十點を數える。寺の御好意で晝食を饗せられ、近江八幡市へ出て宿泊。

十五日（木）午前中日牟禮八幡宮に詣る。社殿は古く文治三年（二八七）の造營にかかるものであるが、現在の鳥居は元和二年（一六一六）の建立、拜殿、本殿は夫々文化二年、四年（一八一九、二一）の改築。社務所で男神坐像二軀、有名な安南渡海船額、古文書數十點を見學。安南渡海船額は當時安南國に居住していた西村太郎右衛門が正保四年に奉納したもので、豎68・5糎、横76・8糎。この船の圖は當時の貿易船の構造や狀況を知るよすがとなるのみならず、當時の風俗を見る上にも好資料たるを失わない。

尙圖の傍には墨書で「奉掛御寶前正保四年丁亥三月吉日安南國居住西村太郎右衛門菱川孫兵衛筆」とある。古文書には、應永三年十二月七日付の佐々木備中守宛足利義滿（管領斯波義將）幕府施行狀を始め、讓狀、下文口宣案、綸旨、書狀等があった。

午後は長命寺へまわる。寺は湖水に臨む山腹にあり、湖山の勝景で、俵藤太秀郷の百足退治の傳説で有名な三上山が繪のように浮んで見える。

さて長命寺は山號を姨綺耶山といい、推古天皇二十七年（六一九）聖德太子の開創とも、武内宿禰の草創とも傳えるが、平安時代園城寺の僧頼智の再興にかかり、元暦元年（一一八四）佐々木

定綱が所領を施入して造營、大永年間には叡山西塔別院となったが、元龜四年（一五七三）信長に焼かれ天正年間に復興し、江戸時代には彦根藩から寺祿百石を給せられた。本堂は天正十八年（一五九〇）、三重塔婆は慶長二年（一五九七）の建立である。本堂内で説明を受け、佛像を拜觀し、古文書を披見した。古文書は全部丁寧に表装されていて計三十五卷。江州嬉綺屋山長命寺縁起を始め、嘉吉戊二年付の大結解錢解下用、天文四年乙未二月付の大結解米下用等數十點を數えた。本日も近江八幡市宿泊。

十六日（金）近江八幡から守山へ出、草津市芦浦の觀音寺を見學。

寺は聖德太子の草創と傳え、特異な規模をもっている。即ち平城形式で濠をめぐらし、築垣に圍まれている。これを管理する西川家は叡山西塔の管領で、足利義滿の頃には湖上管領も兼ねていた。當家では長は僧侶となり城主を兼ね、次は妻帯して血統を絶やさぬことになっているという。當主定昭氏の説明をうかがいながら古文書を拜見した。享徳戊年九月廿三日付右京大夫の花押のある御教書、年代未詳正月晦日付信長朱印狀、年代未詳六月日付信長自筆書狀、秀吉自筆書狀、政宗自筆書狀その他を一覽境内の阿彌陀堂（室町期）、書院（江戸初期）を見學してから石山へ出、晝食後石山寺へ赴く。

石山寺は東大寺大佛鑄造の際僧良辨の夢想によって草創されたと傳えられるが、事實は石山が近江から伐り出した造東大寺用材

の集荷所とされ、石山院が設けられたのはじまり、良辨が天平寶字六年（七六二）頃建立したものと考えられ、宇多法皇の行幸以來皇室の歸依篤く、また公卿、武門の崇敬を受け、紫式部、赤染衛門等も參籠した。鎌倉時代に入り、焼失した堂舎を頼朝が再興して舊觀に復し、その後亂世のため寺領の大半を失ったが、淀君・徳川氏等の庇護を得、再び盛運に向った。

境内には、東大門（重文・鎌倉期）、鐘樓（重文・鎌倉期）、多寶塔（國寶・鎌倉期）、本堂（國寶・平安末期）、御影堂、經藏等の諸建築があり、中でも多寶塔は上下二重の屋根の均齊が實によくとれ、軒の美しい曲線と共に本邦現存多寶塔中最美のものとして、軒の美しい曲線と共に本邦現存多寶塔中最美のものとして、硯灰岩の下の石山觀音菊を愛で、見學日程全部を無事終了した。歸途は東大門前より京阪石山驛まで舟行四時頃解散した。

終りに見學旅行に際して、格別の便宜を與えられた社寺、その他の見學先の當事者の方々に心からの感謝の意を表する次第である（松島忠、記）。